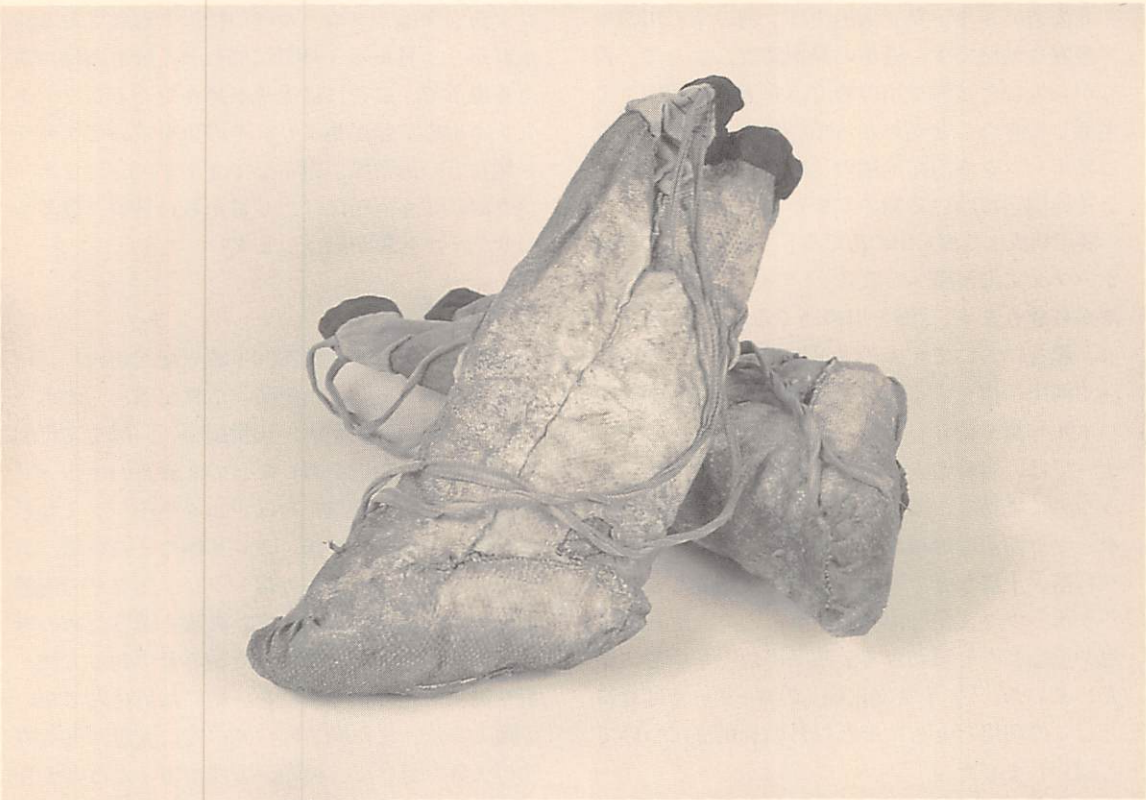
ISSN 0917−4729

北海道立北方民族博物館 Hokkaido Museum of Northern Peoples



サケ皮製靴

北海道アイヌ
高さ 30.0㎝、長さ22.0㎝、幅 10.0㎝

北方民族博物館だより
—37号—

企画展　北の海と川のめぐみ　—縄文文化からアイヌ文化まで—　2
講　座　北の海と川のめぐみ　4
講習会　鹿笛の歴史とはたらき　5
講　座　映像に見る北方先住民の狩猟と精神文化　6
お知らせ・表紙・記事　7
News　8

平成12年2月1日（火）～3月20日（月・祝）

北の海と川のめぐみ

縄文文化からアイヌ文化まで

北海道のオホーツク海沿岸は、海の幸、川の幸が豊富な地域です。近年の発掘調査によって、古くから人びとは海や川のめぐみを大いに利用して生活してきたことがわかっています。本企画展ではオホーツク海沿岸地域の「めぐみ」として、食とその周辺について紹介しました。

展示構成は「海と川のめぐみ」「先史時代」「オホーツク文化と海への敬意」「アイヌ文化期」の4部から成ります。「海と川のめぐみ」のコーナーでは、現在においてオホーツク海やオホーツク海に注ぐ河川に棲息（せいそく）する海獣類や魚類、鳥類を剥製（はくせい）やパネル写真で紹介しました。「先史時代」のコーナーでは、当時の人びとが、何を食べたのか、どうやって捕獲し、またどうやって食べたのかをオホーツク海沿岸地域の遺跡から出土した動物の骨や石器、土器などを展示することで紹介しました。「オホーツク文化と海への敬意」のコーナーでは、海を意識したと思われる装飾品の数々を中心に紹介しました。「アイヌ文化期」のコーナーでは食料としての利用とともにそれ以外の利用法についても紹介しました。

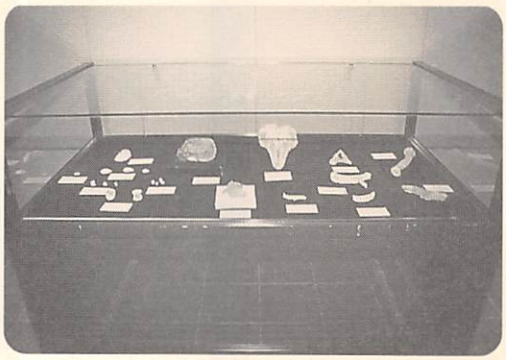
当館所蔵の資料の他、オホーツクミュージアムえさし、標津サーモン科学館、斜里町立知床博物館、東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設、常呂町教育委員会、紋別市立郷土博物館、山田訓二氏の各施設・個人（50音順）から実物資料、写真資料を借用しました。

海と川のめぐみ

全長約500キロメートルに及ぶ北海道のオホーツク海沿岸は、アムール河口付近で形成される流氷群が、1月から3月頃に流れ着く最も南端にあたる場所で、ここには流氷が運んでくるプランクトンを求めて魚が集まり、その魚を求めてアザラシ類などの海獣類が南下してきます。また、オホーツク海に注ぐ河川には、6月から11月頃、数多くのサケ・マス類が遡上（そじょう）します。

先史時代

縄文文化期（紀元前7000年頃～紀元前後）、続縄文文化期（紀元1世紀頃～7世紀頃）、オホーツク文化期（5世紀頃～10世紀頃）、擦文（さつもん）文化期（8世紀頃～13世紀頃）などの北海道のオホーツク海沿岸地域の遺跡からは、ホタテやシジミなどの貝類、サケ・マス類、カレイ類などの魚類、アザラシ類やトド、イルカ類、クジラ類などの海獣類の骨が数多く出土します。獲物を獲るための方法は、動物の骨などで作った釣り針で釣る方法、石や動物の骨で作った銛（もり）を、柄にはめ込んで突いて獲る方法、また網を使って一度に大量に獲る方法の大きく分けて3種類の方法があったと考えられます。



各遺跡から出土した動物の骨

収穫した獲物は、主に石製のナイフや石斧、掻器（そうき）などを使用して解体処理しました。石製の鋭利なナイフで魚類や海獣類、エゾシカなどの陸獣類をさばき、石斧は、木を切るだけではなく、海獣類の脂を掻（か）き取るときにも使用され、掻器は皮をな

めすときに使用されたと思われます。さらに骨製の刀子や鉄製の刀子なども獲物の解体処理に使われたと思いますが、出土数はまだまだ少ない状況です。

さばいたものは、土器で煮る調理の方法がありました。縄文文化期以降、擦文文化期にいたるまでに出土した土器には、火にかけることで付着する煤(すす)や、煮こぼれの跡が残っているものがあります。

煮こぼれ付きの土器

オホーツク文化と海への敬意

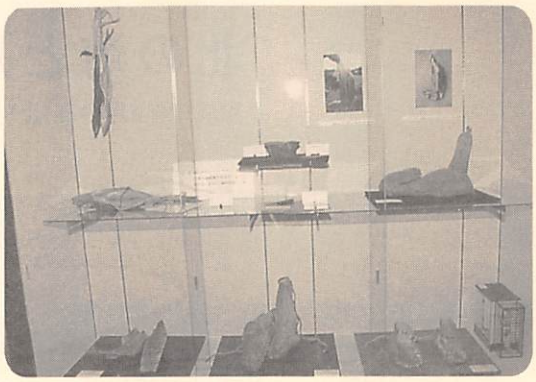
特にオホーツク文化期の遺跡からは、動物の骨や角などに海の生物を彫刻した装飾品や針入れなどの道具、また船の形をした木製容器などが出土しており、彼らの海に対する意識の深さを物語っています。

特に根室弁天島遺跡出土の針入れには、7、8人で海獣猟をしている光景が描かれており、大型漁船を作り、それを操る技術があったことなどが推測できます。

これらの遺物により、オホーツク文化を担った人びとは、オホーツク海沿岸に暮らし、船を巧みに操りながら、漁撈(ろう)や海獣狩猟を行っていたことがうかがえます。

アイヌ文化期

アイヌ文化は、擦文文化を母体として、オホーツク文化や本州の影響を受けながら成立したと考えられており、主な生業は漁撈、採集、狩猟、交易、



アイヌのサケ、アザラシ加工品

そして若干の栽培とされます。重要な資源はサケ類やエゾシカ、採集植物であり、地域によっては海獣狩猟や大型魚類の銛漁もさかんに行われました。

海洋での漁(猟)には、骨製や鉄製の銛先をもつ銛が使用されていました。銛はメカジキなどの大型魚類やアザラシ類、オットセイなどの海獣狩猟に使われました。

河川でのサケ漁には、鉤銛による刺突漁や梁(やな)、籠罠(かごわな)による漁が行われました。鉤銛は、先端にある溝に固定された鉤(かぎ)が、魚に刺さると同時に固定が解除されて溝から飛び出し、魚体をつり下げる構造になっています。梁漁は鉤銛やたも網と組み合わせて行われ、また籠罠は、ハの字型に設置された柵の中央に置かれ、比較的水深の浅いところで使われました。

海獣類は肉とともに脂肪も重要な食料として利用されました。アザラシなど海獣類の脂肪から抽出した脂やタラなどの油は、食事の際の調味料のほか、燃料としても使われ、動物の内臓や木、樹皮で作った容器に入れて保存していました。

サケ類は主に干魚に加工し、冬期の食料としました。

アイヌ文化期には、煮炊き具として内耳鉄鍋が使われました。この形式の鉄鍋は、本州では12～13世紀頃から使われはじめ、北海道では擦文土器を持った人々が、それを模倣して内耳式土鍋を作りました。アイヌ文化期では、15世紀以降の鉄鍋使用が確認されています。

そのほか、サケの皮やアザラシの毛皮を加工して、靴を作り使用していました。

(学芸課　角　達之助)

北の海と川のめぐみ

平成12年2月19日（土）13:30〜16:00　当館講堂

企画展の関連事業として２名の講師をお招きし講演していただきました。以下に要旨を紹介します。

■佐藤孝雄氏（常葉学園富士短期大学講師）
「沿岸部における北海道アイヌの生業と儀礼
— 遺跡出土動物遺体の検討から — 」

中近世のアイヌ期の遺跡から出土する動物遺体は、擦文期以前の遺跡から出土する動物遺体よりも数・種類ともに多くなり、また貝塚の数も従来よりかなり海岸部に多くなる。

例えば貝類については、概して日本海沿岸の貝塚からはアワビを多く出土し、太平洋沿岸ではホタテ貝、アサリが主体を占める例が多い。また海獣類については、知床半島周辺の遺跡ではアザラシ、噴火湾東部沿岸ではオットセイが主体となる。このような地域性は各沿岸地域に棲息（せいそく）していた動物相の違いに対応しており、アイヌ期以前においても同様の傾向が認められるものの、アワビ、ホタテ、アザラシ類の遺体が多量に出土した遺跡は、アイヌ期以前では殆（ほとん）ど知られていない。

このような遺跡が中近世以降北海道各地に形成されていくのは、おそらく交易が盛んになって、肉や毛皮などの需要が高まり、アワビ、ホタテ、アザラシ類に対して集中的な捕獲が行われるようになったことを示すと思われる。

また、遺跡に見られる動物遺体の種類の豊富さはアイヌの動物儀礼とも関連がある。アイヌはクマ送りに代表されるように、自ら獲得するさまざまな動物に対して送り儀礼を行うが、沿岸部に構築された貝塚の一部には、メカジキやウミガメなどを送った、送り場的な性格を持つものがある。

■村木美幸氏（財団法人アイヌ民族博物館学芸員）
「アイヌの食について」

アイヌの生業は、古くは狩猟・漁撈（ろう）・採集が中心で、陸獣類や海獣類、サケ・マス類や山菜、木の実など、収穫時期にあわせて食材を得ていた。そのほかにも、雑穀類や根菜類、和人からの移入品として米・塩・味噌なども利用していた。

アイヌは食料の保存に長（た）けている。山菜や木の実は、そのまま乾燥させ、肉は、一度茹（ゆ）でた後に乾燥させる。また小魚は焼いた後に乾燥させる。アイヌにとって「本当の食べ物=シペ」として重宝されるサケ（主にシロザケ）は、冬の間外で乾燥させ（寒干し）、春になると屋内に移し、いろりの上で燻煙（くんえん）する。また、ユリ科の多年草で幾重もの鱗片（りんぺん）からなるオオウバユリの根（アイヌ語でトゥレプ）も、アイヌの食生活にとって重要な食材で、これは一度発酵させた後に乾燥させて保存する。

料理の中心は汁物（アイヌ語でオハウ）である。オハウの主な具が魚の場合「チェプオハウ」、熊肉の場合「カムイオハウ」というように中身によってその名が変わる。味は主に塩味。味噌は殆ど使わない。塩であっさりとした味付けにし、油を入れて甘みをだし、味のバランスを整える。沿岸部ではサメやタラの油（魚油）、内陸部では陸獣類の脂を使った。普段の食事は、主に塩と油で味付けしたオハウと、粟（あわ）やヒエの粥（かゆ）を食し、米は普段食べずに儀式用として用いる伝統があった。

＊　＊　＊

当日は、お二人の講師が普段あまり目に触れない出土遺物の写真や、食材保存処理の工程写真などを多数紹介してくださり、参加された方々は各講演を熱心に聞き入っていました。

（学芸課　角　達之助）

鹿笛の歴史とはたらき

講師：枡谷隆男氏（北海道札幌篠路高等学校教諭）

平成12年2月12日（土）13:30～16:00　当館講堂

鹿笛はシカをおびき寄せて捕まえる道具であり、楽器のルーツの一つとも考えられています。この講習会では、音楽教師の傍ら各地の鹿笛を研究してきた講師をお招きし、鹿笛の用途や歴史についてお話しいただくとともに、身近な素材を使った鹿笛の製作法を教えていただきました。以下にその概要をお知らせします。

＊　＊　＊

人間は、太古からさまざまな動物を狩猟してきた。五感や運動能力は、多くの場合獲物となる動物の方が優っているが、人間はそれをさまざまな道具で補うことによって獲物を捕えることができた。動物を擬音でおびき寄せたり、動物の精霊と交信したり、離れた仲間に合図を送るなど、大きく、遠くまで響く音を出す道具（＝音具）も、動物を捕獲するための狩猟具としてもちいられてきた。楽器の多くは自然界の音を模倣したものと考えられるが、そのルーツはこのような音具だったのかも知れない。

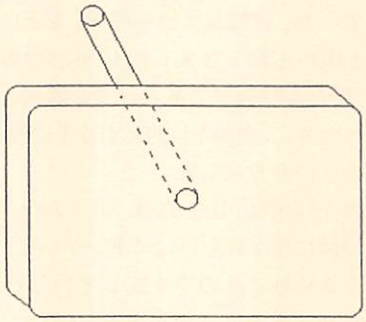
鹿笛もそうした狩猟具のひとつである。鹿笛には、大きく分けて1）牡笛（おすぶえ）、2）牝笛（めすぶえ）、3）子笛の3種類がある。牡笛は、秋の繁殖期にオスが縄張りの占有を周囲に示す独特の鳴き声を真似（まね）る笛である。鹿笛でこの鳴き声を出すと、縄張りを保有しているオスが侵入者を追い払おうとして近づいてくる。牝笛は、発情期のメスの鳴き声でオスをおびき寄せたり、メスの鳴き声でシカの警戒心を和らげて近づきやすくするためにもちいられる。子笛は、春の出産期にもちいられ、親にはぐれたり、天敵に襲われた際に仔（こ）ジカが発する鳴き声を真似て母ジカをおびき寄せるものである。

鹿笛の作り方

鹿笛は、ストローや笹竹、フィルムケースなど、身近な素材で簡単に作ることができる。

東北地方のマタギなどがもちいるタイプの鹿笛は、長さ50～60mm、幅10～15mm、厚さ5～6mm程度のヒノキ板2枚の間にリード（振動して音を出す部分：ビニール、トレーシングペーパー、写真のフィルム片、スナック菓子の空袋、アルミ箔（はく）など）を挟んで重ね合わせ、輪ゴムで両端を縛って作る。

また、北海道アイヌタイプの鹿笛は、縦40mm、横60mm程度に切った発泡スチロール板を本体として作る。板の中央部に斜めに孔（あな）をあけてストローを刺し込み、裏からはみ出した部分を切り取り、裏面にラップを張りつけると出来上がりである。



北海道アイヌタイプの鹿笛

＊　＊　＊

講習会には、小学生から年配の方まで幅広い年齢層からの参加者がありましたが、鹿笛や鳥笛の実演を交えたにぎやかなお話に、終始熱心に聞き入っていました。また、実際の鹿笛づくりでは、上記以外のタイプも含めて数種類を製作しました。参加者は、リードの素材や引き具合を調整し、さまざまな音色を楽しんでいる様子でした。

（学芸課　中田　篤）

講　座

映像に見る北方先住民の狩猟と精神文化

平成12年1月23日（日）13:30〜15:00　当館講堂

講師　渡部　裕（当館学芸課長）

北方諸民族は漁撈（ろう）と狩猟を生活手段としてきました。当講座では映像と解説をつうじて北方地域における狩猟活動と狩猟をめぐる精神文化を紹介しました。以下にその概要を紹介します。

北方の狩猟と精神世界

北方地域では肉や脂肪、自家用の毛皮を得るために陸獣や海獣類、鳥類などを対象とした狩猟が行われてきました。狩猟具は槍（やり）や弓矢、銛（もり）といった伝統的道具が用いられてきましたが、外部世界との接触によって新たな狩猟具である銃や金属製のワナなどの入手とともに、交易を目的とする毛皮獣狩猟も行われるようになりました。

北方の先住民は、山や森林、川、海といったさまざまな領域に神々あるいは<主>がいて、その領域に属するあらゆるものを支配していると考え、また、あらゆるものに霊魂があると信じてきました。このような認識のなかで、人びとは各領域を支配する神々に動物を獲らせてくれるように祈願するとともに、神々との約束事のもとに狩猟を行い、その獲物を正しく取り扱わなければなりませんでした。しかし、神々や諸霊のなかには人間に好意をもたないものも多く、人びとは邪悪な神々や諸霊がもたらす災難から逃れることにも努めなければなりませんでした。

狩猟儀礼と動物の再生

一般的に狩猟儀礼は猟のシーズン前に行われ、獲物を必要なだけ人間の世界に送ってくれるように祈願する集落全体の儀礼からはじまり、各狩猟ごとに行われる感謝の儀礼や動物送り儀礼、さらに狩猟のシーズンの終わりに行う全体の感謝の儀礼、シーズン中の獲物の霊魂を神の元に送る儀礼がなどが行われてきました。そして狩猟の日々だけではなく日常生活のなかでも神々や霊魂との約束事を守るために、さまざまなタブーが存在してきました。

このような精神世界は今日でも狩猟民社会にみとめることができます。当館によるカムチャツカ半島におけるエヴェンやイテリメンの調査から、その事例を紹介するとともに、以下の記録映像をつうじて、シベリア、中国北部、北アメリカの事例を紹介しました。

上映映像

当館で所蔵する以下ビデオテープの一部を上映し、北方における狩猟の在り方と狩猟にかかわる精神世界を紹介しました。映像別にその概要を紹介します。

『ミスタッシニのクリーの猟師』1974年、カナダ国立映画制作庁

カナダ東部ケベック州のジェームズ湾東部に居住してきたクリーの4家族が、狩猟地で晩秋から春にかけてクマやビーバー、ウサギ、ヘラジカ猟を行いながら生活する様子が記録されています。クマや火の神に対する観念や取り扱い、動物の頭骨を木に下げる慣習には、アイヌをはじめとする北方諸民族と共通する精神世界が描かれています。

"The Life in the Bears"　1988年、アラスカ大学フェアバンクス校、KUAC-TV

アラスカ北東部の針葉樹林帯に暮らすアサバスカインディアンのクチンの狩猟者がスノーモビルを駆使してクマの冬眠穴における猟を記録した映像です。クマが特別の動物として考えられ、その観念が若い世代の狩猟者にも受け継がれていることがとらえられた作品です。

『赫哲族的漁猟生活』、1965年、中国社会科学院民族研究所・『鄂倫春族』、1963年、中国社会科学院民族研究所

この2本の作品は中国北東部、黒龍江支流のホジェンと興安嶺山脈に暮らすオロチョンの狩猟や漁撈を記録した映像です。ヘラジカなどの陸獣狩猟やシャマンの儀礼を紹介しました。

『シレニキ村年代記』、1990年、PIXART, Montreal

ソ連時代末期に記録されたチュクチやシベリア・エスキモーの人びとが暮らすシベリア北東端チュコト半島の村シレニキにおける映像で、体制の変化にともなう生活や伝統文化の在り方をとらえています。海獣狩猟や海獣利用の状況を紹介しました。

（学芸課長　渡部　裕）

今号の表紙 ―サケ皮製靴―

サケは食料としてだけでなく、その皮は衣料や履物の材料としても使用されていた。アムール河中下流域からサハリンにかけて居住してきたニブフと、ナーナイ、ウリチといった民族は、上衣やズボン、靴などの素材として魚皮を用いていたが、北海道アイヌでは靴以外に魚皮が使用された記録は少ない。

サケ皮で靴を作る場合、どのような皮でもよいのではなく、川を遡上(そじょう)し、産卵場に入って背鰭(せびれ)の先が少し白くなりかけた雄の皮が用いられた。海や河口でとれた雄の皮や雌の皮は、薄くて靴には使えないという。

表紙のサケ皮製の靴は、北海道アイヌが使用していたものである。靴底中央に位置する背鰭は滑り止めの役割を果たし、また雪道を長時間歩く場合は、靴を履いたその下に、木製の枠でできた横幅が広いかんじきをつけて使用することもあった。

みんぞく こうこ はくぶつかん in 北海道

このコーナーでは当館の活動に関連する分野の新聞記事のうち、道外ではあまり紹介されていない情報を掲載します。

1/6 アイヌ民族伝統の保存食「サッチェップ」（サケの燻(くん)製）がピークを迎え、1月末から販売を開始、白老町／M

1/8 戦国時代の遺跡「勝山館」から、祈祷用具らしい木製品が出土、上ノ国町／D（夕）

1/15 アイヌ民族の織物技能を学ぶ機動職業訓練が帯広生活館でスタート／A

1/19 16世紀後半から17世紀初めのものと推測されるアイヌの弓出土、上ノ国町／Y

1/30 縄文時代後期（3500年～3800年前）の船泊遺跡から乳幼児から成人までの人骨約30体が土器や装飾品とともに出土、礼文島／Y

3/1 美幌博物館で「ケリ（アイヌ語でサケの皮で作った靴）」作り講座、美幌町／D

3/11 アイヌ民族の伝統文化を学ぶ「ヤイユーカラの森」が、釧路管内阿寒町で開くシカ狩りキャンプの参加者を募集／D

3/25 北海道ウタリ協会が、アイヌ民族の伝統音楽や古式舞踏を披露する「第六回アイヌミュージック・コンサート」を開催、札幌市／D

3/27-3/29「海を渡ったアイヌ絵巻 絵師・貞良の世界」を連載／D（夕）

※A：網走新聞 D：北海道新聞 M：毎日新聞 Y：読売新聞
複数紙掲載の場合は扱いが大きい方を紹介しています。

木彫り「熊」源流展

(財)アイヌ文化振興・研究推進機構助成事業

6／6（火）～7／2（日） 当館特別展示室（観覧無料）

北海道を代表する工芸品「木彫り熊」に焦点をあて、ルーツをたどる展示会。その伝統を支えてきた旭川のアイヌ民族や木彫り熊発祥の地・八雲町の名匠たちの作品を一堂に集め、大正～現在までの変遷を紹介します。

また、期間中6／10（土）14:00～16:00には、当館講堂において、講演会「木彫り熊の源流を求めて」を開催します。講師は旭川市在住の木彫家・平塚賢智氏と当館学芸員・齋藤玲子。およそ80年にわたる木彫り熊の歴史について、その原点と、道内各地の特徴や時代の流れと作風の変化などについて概観します。参加は無料です。

News

■執筆者・出版社から贈呈を受けた書籍等（1月～3月）

・菊池勇夫　1999　『エトロフ島～つくられた国境～』吉川弘文館
・V.サンギ　1999　『サハリン・ニヴフ物語～サンギ短編集～』北海道新聞社
・井上紘一　1999『Dear Father!～A Collection of B.Pitsudski's Letters, et alii～』Pilsudskiana de Sapporo no.1 北海道大学スラブ研究センター
・南日本新聞社　1999『かごしま黒豚物語』南日本新聞開発センター
・赤坂憲雄　1999『東北学』vol.1 東北文化研究センター
・伊藤せいち　1999『アイヌ語地名研究2』アイヌ語地名研究会
・北道邦彦　1999『ノート版アイヌ神謡集』北道邦彦
・ジャパン通信情報センター　1999『カナダ先住民族の芸術とこころ～ノースウェスト・コーストの版画にみる美と精神世界～』
・小学館　1999『全国古代遺跡古墳鑑賞ガイド～古代ロマンの世界へご招待～』小学館
・木村英明 1999『古代に遊ぶ～考古学資料集2～』札幌文庫80 札幌文庫
・木村英明 1999『シベリアの細石刃石器群 考古学資料集２』札幌大学文学部考古学研究室
・木村英明 1999『シベリアの細石刃石器群（2）考古学資料集８』札幌大学文学部考古学研究室
・木村英明 1999『北東アジアにおける細石刃鏃文化　考古学資料集６』札幌大学文学部考古学研究室
・呼人区会百年記念事業実行委員会『ふるさと呼人～呼人100年史～』「ふるさと呼人」編集委員会

★東京都の原ひろ子氏から蔵書277点が寄贈されました。当館では原文庫として整理しました。

■主な来館者

2/17（木）　奈良国立文化財研究所
蓮沼麻衣子氏
2/23（水）　国立歴史民俗博物館
教授　福原　敏夫氏
助手　島村　恭則氏
小野寺重喜氏
立命館大学国際平和ミュージアム
学芸員　山辺　昌彦氏
3/17（金）　慶北大学校
総長　朴　賛石氏
慶北大学校農科大学長・農業開発大学
院長　李　準琸氏

■その他の行事報告

1/22（土）　博物館クラブ
「石器をつかってみよう」
3/11（土）　博物館クラブ
「かんじきで歩こう」
3/17（金）　平成11年度第４回資料収集評価委員会議

■行事案内（5～7月）

5/3（水・祝）～7（日）
常設展示ガイド
5/20（土）講習会
「とんぼ玉つくり」＜指導者コース＞
5/21（日）講習会
「とんぼ玉つくり」＜初心者コース＞
6/6（火）～7/2（日）
「木彫り「熊」源流展」
6/10（土）講演会
「木彫り熊の源流を求めて」
7/2（日）博物館クラブ
「トーテムポールづくり①」
7/8（土）博物館クラブ
「トーテムポールづくり②」
7/18（火）～9/24（日）
第15回特別展「トーテムポールとサケの人びと―北西海岸インディアンの森と海の世界―」
7/20（木・祝）講座
「北西海岸インディアンの歴史と文化」
7/29（土）講演会
「トーテムポールとサケの人びと」

■観覧者動向（1～3月）

	常設展示	企画展
1月	676	—
2月	2,015	1,473
3月	1,988	1,026
計	4,679名	2,499名

■職員の異動

退職（3月31日付）副館長　吉田耕司
転出（4月1日付）
管理係長　楠山尚己（北海道教育庁企画総務部教育政策室へ）
転入（4月1日付）
副館長　髙杉敏雄（北海道教育庁根室教育局から）
管理係長　上野達夫（北海道教育庁網走教育局生涯学習課から）

■友の会会員募集中

北方民族博物館友の会平成12年度会員を募集中です。友の会では季刊誌「Arctic Circle」や「友の会だより」をとおして北の文化を紹介しています。年会費は3000円。すでに会員になられた方は、お知り合いにもご紹介ください。詳しくはお問い合わせを。

■編集後記

例年よりやや遅くやってきた流氷は、例年通り網走から去っていきました。これから網走も少しずつ暖かくなってゆきます。桜の季節は本州より一月遅れの５月頃。いまから楽しみです。

（角）

北方民族博物館だより
―第　37　号―
2000年4月28日発行

編集・発行　北海道立北方民族博物館
〒093-0042　北海道網走市字潮見309-1
TEL 0152-45-3888　FAX 0152-45-3889